

<最優秀賞 최우수상>

韓服が結ぶもの

趙 栄*

一着の韓服がある。

まるで、咲き初めたチンドルレのような、爛漫の桜の花びらのような、薄紅色のチマチョゴリ。薄い絹地は、蝶の翅のようだ。結婚式を半年後に控えた6年前の秋、娘と私がソウルを訪れ、花嫁衣裳として誂えたものだ。娘が嫁いだのは5年前の春だった。相手は、大学のサークルの先輩。日本の青年である。娘は在日3世、言わば国際結婚であった。

私たち夫婦が結婚式を挙げたのは、30年前のちょうど同じ日だった。同胞同士の見合い結婚である。

「日本人との結婚は絶対に許さない。どうしてもと言うなら、その時は親でもなければ、子でもないと思え」同胞同士の結婚。それは、父の厳命であった。父が慶尚南道の田舎に生まれたのは、日帝時代。食うに困った祖父母は、当時2歳の父を背負って海を渡った。東京に居を構えて、屑鉄屋を始めた。当時の在日の御多分に洩れず、父の家族は貧しく辛い経験をしてきた。苛められ差別を受けてきた父にとっては、日本に対する“恨”は根強いものがあつたようだ。多くを語りたがらない父の心の傷を、肌で感じながら育った二世の私は、父を裏切るような結婚はすまいと誓った。見渡せば日本人という環境のなかで、私は日本人に対する恋心を封印した。

聞けば、夫の父も同じだったという。同じような家庭環境に育った私たちは、言葉にせずとも通じあう思いがあつた。一男一女に恵まれた私たちは、しかし、一世のように子どもたちを育てなかつた。仕事も結婚も、本人の自主性と自由を尊重しようとした。子どもが愛した人ならば、国籍は問うまいとも思った。

娘の結婚式。お色直しは、新郎は羽織袴を、新婦は韓服を身につけた。三十年前の私たちの時代には、考えられない光景だった。お互いが、それぞれの民族衣装で、お互いを尊重する。それを、無理なく表現できる時代なのだ、私たちは感慨無量であった。

3年前の秋、息子も同期入社日本人女性と結婚した。お嫁さんは、「お義姉さんの韓服を着たい」と言ってくれた。韓国人に嫁ぐ思いを、彼女も健気に表わしてくれた。そして、この夏は、甥が日本人女性と式を挙げた。彼女もまた、この薄紅色の韓服を着てくれた。オッコルムを結んであげながら私は、こんなふうに韓国と日本が繋がっていくことの不思議を思った。

今、韓日の関係は決して良いとは言えない。嫌韓論、ヘイトスピーチ……。はるか昔、国境などなかつた時代には、人々はそれぞれの民族を尊敬し、良き関係を築いたのであろう。半島から来た男と島の女が愛情で結ばれたこともあつたかもしれない。韓国人と日本人は、同じ茎に咲く花のようなもの。一着の韓服が、それを教えてくれている。

<優秀賞 우수상>

星の光を浴びて

足立 龍*

ソウルの友人・趙貞順さんが自叙伝を出版することになった。彼女は1940年慶尚北道の生まれ、5人兄妹の末っ子。小学校にも中学校にも入学はしたが、8歳の時、お父さんが亡くなり貧しくて、どちらも卒業証書ももらっていない。しかし兄妹みんなから愛されたので、暗いイメージはない。

そして、貞順さんは昼は大邱の男子高校の先生たちの助手の仕事をしながら、夜間高校に通い、ソウルの大学を卒業した。26歳で事業を始め、学院経営で成功。あとは長く院長を勤め、私たちと出会った25年前には院長を引退した後だったが、いつまでも、ウォンジャンニムと呼ばれていた。

今年春、大阪の友人のエッセイ集を、貞順さんに渡したら、すらすらとは読めないけれど、気に入ってしまって常に持ち歩いていた。

ちょうどその頃、自叙伝出版の話が出てきた。表紙をどうするか、どんなカットを入れるか。すぐにひらめいたのはエッセイ集のカットだった。エッセイ集を抱きしめて、こんな花の絵が好きだが、どうしたらいいかと相談を受けた。

そこで思いついたのが、吹田の元同僚の原さんの水墨画だった。原さんの絵の2、3枚は貞順さんにも送っていた。貞順さんは原さんに会ったこともあるので、希望の花の名前を連絡して頼んでみた。「タンポポ」「梅」「ユリ」…なぜか「オキナ草」など。すぐに描いてくれた。

現物は私が直接渡すことにし、先にパソコンで送った。出版社も気にいって、10種類ぐらいのリクエストが送られてきた。手元にあったのも入れると、20枚以上になった。

表紙の希望は、紫色の「トラジ」か「ショウブ」。結局「ショウブ」と決まり、話はとんとん拍子に進んでいった。

6月には原画を渡し、原さんの紹介文の話になった。貞順さんの考えでは、ハングルで「はら としこ」、敬称に「画伯」か「画家」を付けたいという。「どちらがいいですか」。おっと～、びっくり仰天「どちらもダメです！」貞順さんは困った顔で、「では《先生》はどう？」「ダメ！ダメ！ダメ！ はら としこ《さん》にしてください」と言うと、なんでや？という表情。

「さん」は韓国では使わないから「氏」ということで落ち着いた。

7月25日、校正の部屋には、カトリック出版社の女性が入れ代わり立ち代わり。出版社の元社長だった男性、尚州からKTXで来たというシスター、そして、本人と原稿を整理してくれた姪と私。

気になっていた紹介文も短くまとめてあった。「日本人はら としこ氏は、韓日文化交流次元で絵を寄贈した」と。あずけたカットは全部使われていた。丁寧な仕事だ。

カトリック教皇の韓国訪問と重なり、出版は9月になるが、ソウルのカトリック関係はもちろんのこと、大邱の出身高校でも祝賀会をしてくれるという。

大阪でも手作りの翻訳本を作り、貞順さんを招待してパーティを開こうと決めた。

普通のおばちゃんの “振り返れば人生美しき日々”

佐藤 雅*

10年前、私は人生の崖っぷちにいました。偶然見つけた胸のしこりが癌だったからです。術後状況も厳しく、元々は鈍感な私もまだ6才と4才の娘を残していく無念さと、薬の副作用に苦しみ、生きる気力を失っていました。そんな寝たきりになっていたある日、布団の中から惰性でつけたテレビにふと目が止まりました。それは当時NHKで放送の韓国ドラマ“美しき日々”のワンシーンでした。しゃがんだ女性の横を男性が通り過ぎる時、指先で女性の頬をほんの微か軽く触れる、不思議なアングル、セリフもないのに色っぽくて繊細なシーン。

私は一瞬で体の不調も忘れてこのドラマに魅入られてしまいました。

そしてドラマの後半に私の人生を変えたセリフに出会います。このドラマの主演は有名なイ・ビョンホンさんとチェ・ジウさんです。二人は愛し合い様々な障害も乗り越えますが、彼女は白血病になってしまい彼のために別れを決意します。そんな彼女に彼はこんな言葉をかけます。「よく聞いて。僕は君が病気になって良かったと思ってるんだ。これで僕は誰にも気兼ねしないで君の傍にいられる。君が一番必用としているのはこの僕だとわかっているから。君を絶対に死なせない。僕が治してみせる。」日本語訳のこのセリフは思いがけず私の心に響きました。発病以来私は自分を世の中にも家庭にも不要で迷惑な存在と感じていました。虚しく孤独でした。けれど彼のこの言葉は、社会の輪から弾き飛ばされた私を中心まで引き戻して、私を人生の主役に戻してくれたように感じました。

補足すると、私は夫にこのセリフを言って欲しかったわけではなく、夫は言葉少なくとも誠実に私を守ってくれました。イ・ビョンホンさんに言って欲しかった…わけでもありませんので。よく韓国ドラマは白血病が多いと聞きますが、それは白血病だったり、貧しかったり、記憶喪失だったり、不幸続きだったりする人を認めて大切に描いてくれているから。日本のドラマは若者中心のオシャレでライトな感じですが、韓国ドラマはとても激しく、孤独で弱った人間はその激しさに共感して本当に癒されます。あれから10年、私は回復し病気だったとは思えない体格になり、娘達は立派な韓流娘になりました。長女は学生ダンス交流で渡韓させていただき、次女は韓国語を学ぶため受験勉強中です。

夫はギター演奏やロックが趣味ですが、娘たちにK-POPを聞かされライブにも連れていかれて、徐々に曲も覚えてきて教育の成果が現れています。

今思い出しても当時は“美しき日々”を繰り返し見て、支えに本当に頑張りました。主題歌を聞くと瞬間に記憶が蘇ります。ママ友や先生達に病気を打ち明けて助けてもらったこと、親子で毎日通院したこと、両親に泣かれたこと。私に生きる力をくれた韓国、どうもありがとう。“美しき日々”は最高のプレゼントでした。

<優秀賞 우수상>

ありがとう、おじいさん

嵯峨 久美*

2009年の秋、当時大学2年だった次女がソウルの大学に半年間留学しました。私も韓国語を習い始めていたので、その年の秋から今までに4回韓国へ旅行しました。

旅行中のことを今も時々思い出します。ソウルで乗った地下鉄のことを。

「韓国は儒教の教えが強く残っていて、電車の中では、目上の人やお年寄りに席を譲る」ということを、一応知ってはいました。

でも、実際にソウルの地下鉄に乗ってみて、本当に驚きました。お年寄りが乗ってくると誰かしらさっと席を立ちその人に席を譲る、という若い人の姿にです。地下鉄のどの線に乗っても、同じように、さり気なく席を立てていく若い人の姿をたくさん見かけました。

2012年9月。娘と2人でソウルに行った時のこと。2人で地下鉄に乗って吊革につかまっていると、私たちから少し離れた席に座っていたおじいさんが、私たちに向かって、韓国語で何か大きな声で言っているのです。「何と言ってるの?」と娘に聞くと「あのおじいさんがね、お母さんに、『ここに座りなさい』って」。一瞬、「え? その席の前には別のおじいさんが立っているけど……」と私がためらっていると、おじいさんは少し怒ったようにまた言いました。「『いいから、あんたが座りなさい』って言ってる。だからお母さん、早く座って」と娘に促され、私は小さな声で「すみません」と言いながら座りました。

実は私、数年前に足の手術をしてから、杖を使うようになりました。それで、あのおじいさんは、私を座らせたかったのでしょうか。

その時は、ありがたいというより、何だか申し訳ないという気持ちの方が強かったのです。私がここに座ってよかったのかしらと。けれど時間が経つうちに、「もっとちゃんとお礼を言えばよかった」という後悔と、おじいさんへの感謝の気持ちがふくらんでいきました。

あの時のおじいさんの言葉には、有無をいわせない強さと、ほんの少しだけ、怖い雰囲気もありました。けれど、その言葉の中におじいさんの優しさがあったことを、日本に戻ってから気付きました。

黙ったまま席を譲る若い人も素敵ですが、まるで、自分のおじいちゃんに「あんた、こっちにいらっしやい」と言われたような、そんな雰囲気のおじいさんも素敵だなと思います。あの時ちゃんとお礼が言えなかったのも、今ここで言いますね。

「おじいさん、あのときはどうもありがとうございました！」

夢がかなった日

秋本 美佐*

私は一度だけ、釜山に行った事がある。在日韓国人の、厳さんのお墓詣りに同行して、釜山を訪れたのだ。墓前にめかずき、肩を震わせながら、お祈りをささげるその姿を、今でもはっきりと覚えている。

長い間の想いが叶ったその時、ここまで導いて下さった大いなるものに、私は心から感謝をした。韓国人の厳さんが、異国の日本で抛り所にしていたのは、故郷や、親兄弟、ご先祖様ではなかったろうか。ほんの少し、在日韓国人として生きて来られた厳さんの心根を、かい間見たような気がした。

その当時、私は看護師をしていた。毎日、先生の往診について行く。厳さんは長い間の無理がたたって、肺の病気で酸素吸入が離せない状態だった。往診のたびに、「墓参りだけが、心残りなんや。3日だけ、体を治してくれんかね」と懇願した。先生は夏を乗り越えた厳さんに、「寒くならない前に、墓参りをされるといいですよ」と、許可を出した。先がそう長くない厳さんのことを思い、苦渋の選択をしたようだ。厳さんは「墓参り、いいんかね。嬉しいねえ。そんでな、お願いだから、看護師さん付いてきてもらえんかね」と言う。

動揺する私に、先生は「一緒に行つてあげなさい」と穏やかに言った。私は日頃から、なにか厳さんの役に立ちたいと思っていたので、こういう形で力になればと同行を決めた。10月4日、2泊3日の旅。民団の方にホテル、飛行機はもちろん、酸素の手配など事細かく、動いてもらって出発できた。先生は急変があったら病院で診てもらおうようにと、病状を書いた手紙を私に持たせた。

釜山に宿泊して、翌日が墓参りだ。厳さんの体調は良い。酸素を吸いながらも、気分は高揚していて、幼い頃の事など口をついて出る。車は市内から山の方に向かう。運転は釜山に住む甥。その妻がたくさんの供え物を持ってきた。墓地は山の中腹にある。山道を登って行く。83歳の厳さんの足では登れそうにない。本人も諦めて「せっかくここまで来たが、上までは無理だ」と力なく草の上に腰を下ろした。甥と妻、厳さんの妻は、厳さんを振り返りながら登っていく。

どの位たつたろうか、3人の中年の男性が、草むらを駆けながらやって来たかと思うと、「アボジ」と厳さんに声をかけた。厳さんは立ち上がり、韓国語で叫びながら、ひとり、ひとりと強くハグをした。ソウルからの甥達だった。上までは登れないと、首を振る厳さんなど構わず、2人が両脇を抱えた。ぐいぐいと引っ張って行く。厳さんが墓地に登って行った時、先の3人は歓声をあげた。連れてきてくれた人がソウルの甥達というのも、思いがけない事である。厳さんは、墓前にうやうやしく額づいた。長い祈りだった。

離れて立つ私の目から、とめどなく涙があふれた。

韓国で感じる日本文化

カン ハン*

私は一人旅で日本に足を運ぶ時から日本文化へ興味深くなり、日本に関するエッセイを韓国で何冊も出版している。「東京ソラ東京(동경하늘동경)」、「私たちの散った日々(우리 흩어진 날들)」、「京都、休(교토 휴)」、「野菜は日本の女性のように(채소는 일본여자들처럼)」の4冊の本がそれであり、今は日本に住みながら5冊目の本を執筆している。

正直に言うと、私がこのように日本に関するエッセイを次々出せるようになったのは、韓国で日本文化に関する興味が高いからだと思う。関心の無いコンテンツを一生懸命に書いても出版社や読者の反応は無いからであり、6年間日本に関するエッセイを4冊も出版したことはその証明だと思う。

日本政府観光局の公式統計を見てみると、2004年から2013年まで日本に訪問する外客数の中、韓国人が不動の一位を占めていた。各国の人口数を考えてみると中国やアメリカ、インドより日本に訪問する外客数が高い韓国は、日本と日本文化に興味がとても高いとも言えるのではないのか。

特に、私が感じた限り、韓国では日本の日常生活や衣食住文化に関する興味が深い。現在、韓国では日本から進出したラーメン屋さんからカレー屋さん、とんカツ屋さんなど本場味を楽しめる場所が次々登場し、無印良品、UNIQLOなどの雑貨や洋服なども人気である。私が韓国の友達に日本のお土産を用意する時にも、韓国の友達は私より日本の物に詳しいというか、どこどこのを買って来てと頼むほど、評判の良い話題のグッズやブランドもあるくらいだ。なので、私は日本に住みつつ日本と韓国を見てみると、両国は近くにいるんだなと思う時が多い。

私の本を読んでもくれた読者たちからファンレターを貰う時にも同じ事を感じる時がある。ある日、読者からメールが来た。「ハンナさんの本を読んでどうしても行きたい場所があって京都まで行ってきました。それは、祇園にある文具店と昔ながらのレトロ風の喫茶店でした。祇園にある文具店のおばちゃんにハンナさんの本を見せたらとても喜びました。私も嬉しかったです。私はあの文具店で便箋としおりを買いましたが、大切な人に手紙を書こうと思っています…」

幸せな瞬間だった。日本文化を紹介するエッセイを書くたびに感じる事。それは、韓国の人々が私の本を読んでもくれるだけでは無く、わざわざ足を運んで日本に来て日本文化を経験する関心や興味である。

また、その旅で出会った日本人と仲良く交流したり、新しい日本文化を自分らしく感じたり、韓国文化を日本人に教えたり、また韓国に帰って周りの人々にそれを知らせたりすることは著者としての私の大喜びであり、韓日の間で「文化」というものが本当に大事なものなんだなと感じる時である。

「和而不同」の日韓関係を求めて

滝澤 姫*

日韓両国の将来を担う若い世代が望ましい両国関係を築くために必要なことといえば、雨森芳洲の「誠信交隣」や「和而不同」（『論語』）という言葉が真っ先に浮かぶ。「然り是れ理論としては陳腐なるも、実行としては新鮮なり」。かつて民権論に批判的だった人々に向けて中江兆民が発した言葉である。この言葉をもじって日韓関係についていえば、「誠信交隣」や「和而不同」は、手垢のついた「陳腐」な言葉かもしれないが、その実行としていまだ「新鮮」である。

私がこのように考えるようになったのは、小学生の頃から習っているダンスを通して、韓国人や他の外国の人々と素直に気持ちを通わせることができた経験をしたことが影響している。日本では、小中学校のときからダンスが教科科目の一つであり、韓国でもいまや、ダンサーが高い評価を受けていることを知った。そこで、ダンスや音楽のように言葉の壁を越えての交流をしたいと常々考えていた。

このような思いは、高校生のときに韓国に短期留学をしたことにつながり、そのときに「ダンスや音楽の前では言語も国籍も問題にならない」と改めて強く感じた。ホームステイ先の家族の前で挨拶代わりにダンスを披露すると、韓国人のお兄さんがピアノ伴奏を加えてくれた。すると、すぐに和やかなムードとなり、お互いの距離感が一挙に縮まることを肌で感じた。この留学経験を通して、改めて韓国のことが好きになり、自分のできる限りにおいて日韓の友好的な関係構築に率先していきたくて決心した。

いまだ、一部の「大人気」のない「おとな」たちの政治的なパフォーマンスや歴史認識をめぐる対立が表面化する度に日韓関係は「一步改善、二歩悪化」の様子を呈しているが、「百聞は一見にしかず」という言葉があるように、私たち若い世代は、このような現実を目をそらさず、face to faceの交流を可能にする力を持っていると私は信じている。

というのは、日本における2011年3月のあの東日本大地震、また韓国における今年4月のセウォル号沈没事故に際して、日韓の若い世代は、被災した人びとや事故に遭われた人びとに対して、ともに無事を祈り、ともに悲しみながら、改めて「絆」の大切さを感じていたに違いないからである。日韓両国の若い世代が今後の新しい日韓関係を構築するためには、「過去」を直視しつつ、「にもかかわらず」の前向きな態度を持って「今」や「明日」にその鍵を求める必要があるだろう。

来年の2015年は、光復または終戦から数えて70年、日韓国交樹立からは50年にあたる。とくに、韓国の光復、日本の終戦世代からすれば3世代にあたる今の若い世代が将来の4世代、5世代に今よりは「マシ」で、改善された日韓関係を「遺産」として残せられる両国の新しい関係の出発点としたい年でもある。

そのために、明日に向かって生きる私たち若い世代から、真心をもって「誠信交隣」や「和而不同」の交流を実践していきたい。

<佳作 力作>

私を感じた韓国、韓国人

高木 香奈*

人生とは出会いそのものである、という言葉を目にしたことがあります。

私は韓国でたくさんの大切な出会いがありました。その中のひとつを皆さんにご紹介したいと思います。そしてイメージだけではない、私が実際に感じた韓国の人々の心が少しでも伝わったなら、これほどうれしいことはありません。

2012年7月末。空には思い思いに歩を進める雲が漂う、心地良い夏の陽射しの中、ソウル・仁川空港に私は降り立ちました。生涯忘れることのできない韓国生活の始まりです。

生活の基盤は住まいです。まず初めに私は学校からほど近い、女性専用コシウォンに住むことを決めました。コシウォンとは、元は受験生の勉強部屋として建てられた、個室型共同住宅のことです。その一般的なイメージは狭く汚いものだよと、韓国の友人に教えられたことがありますが、実際に私の住んでいた部屋は日当たりもよく大きな窓があり、一日を終え身体を休めるには十分な部屋でした。そして何よりそこに決めた一番の理由は、大家さんご夫妻でした。

最初に見学に行ったとき、「この周辺は住むところがたくさんあるから、全部見て納得してから来なさい。返事はいつでも良いから」とおっしゃり、まだ見学に行っていないところを調べて、韓国語の拙い私の代わりに順々に電話をかけ、地図まで持たせてくれました。住み始めたあとも、いろいろな人と話すことが一番の勉強になるからと、週末には必ず一緒にお茶を飲みながら、社会問題や景気の現状、宗教、人生観等、様々なことについて話し合いました。同年代以外の韓国の人とそのような時間を持つことは、とても貴重な時間でした。

特に印象的だった出来事があります。バイト先で失敗をして帰宅した日のこと。勉強に焦りを感じていた時期でもあり、沈んだ気持ちを抱えたまま屋上で本を読んでいた。そこへ奥さまが花の手入れに上がってきて、私の顔を見ると優しく笑い、冠岳山を眺めながら「この歌知ってる？昔の歌だけど」と、口ずさみ始めたのです。

花の可憐さを讃えて、もっと咲いておくれ、というような内容だったと記憶しています。とても美しい歌でした。そのときっと表情に出ていたであろう私に、何も聞かずに心だけ寄り添ってくれたことが何よりありがたく、自然と涙がこぼれました。

一歩住まいを離れてみても、韓国では重い荷物を抱えていると必ずと言ってよいほど声をかけられ、道を尋ねれば丁寧に教えてもらい、迷いのない親切心に幾度も助けられました。もちろんこの国においても見極めは必要ですが、私が実際に住みながら感じた韓国の人々の心は、どんなときも体温を感じる優しいものでした。日本に戻ったいまでも、瑞々しい太陽の香りをたっぷりと含んだ韓国の風を思い出すことがあります。

皆さんの知る韓国という国には、懐かしい絆に満ちた優しい人々の心が散りばめられていることを、心からの感謝とともに改めてお伝えしたいと思います。